

三年七月下旬であり、これらのことは、生涯忘れることができない。

騙されて四年

新潟県 青柳善吉

終戦は北朝鮮清津高射機関隊で迎えた。羅南師団管区師令の命令で、北鮮朱乙で武装解除、右茂山収容所へ。収容所は裏の丘に穴を掘り、石を積み上げた、十五人しか入れない、粗末この上なしの施設。中に石で炉をつくった。

ダワイで薪とり作業、食糧は十五人で米三合、大豆一升、塩スプーンに一杯である。初めのうちは大豆を煎って食べ、水を飲んで腹をふくらませていたが、全員が下痢をするような始末。相談して一斗缶に大豆、米を入れ、水を入れて雑炊をつくって、各人飯盒のふたに分けあって食べることにしたが、なんとしても腹がすく。

日に日に身体力がなくなっていくばかり、蛙、蛇、

食べられると思われるものは、青ざや、がえるつ葉、片っぱしから腹を満たすために食べる日が続いた。一人当たり毛布一枚の寝具、シラミがたかり、水で洗っては石の上で乾かしては使っていたが、発疹チブスが発生し、一人また一人と死んでいった。

屍は埋葬することになったが、穴を掘る力もないので、畠のウネの間に置いてくるのがやっとである。烏が何百羽となくきては屍体を食い荒らす。風に乗って屍臭が鼻をつく。風呂に入れるようになったのは三か月後の十月末である。

十一月、右茂山駅から平城港、そこから船に乗せられ、通訳当番となってポセツ港に着いた。通訳が聞いたところでは、三年くらいは覚悟しなければならないとのことだった。「ダモイ、トウキョウ」の言葉を無条件に信じたために大変なことになった。「しまった」と叫んでも後の祭り。当時二十六歳だから、二十九歳まではどういうことになっていくのか、死んでたまるか！という気持ちで通訳に、寒いところはいやだ、暖かいところへやってくれと頼みこむと、明日五百人くらいの作業隊を

編成するから、それに入れと言われて、汽車に乗った。

二十五日もかかって着いたところは、ウズベック共和国のタシケント、第十六収容所の分所だった。

電気工事の工場で、ソ連人五百人、我々抑留者千人の従業員で、中にあるのは、驚いたことに戦利品で運ばれてきたのか、日本の製品、ドイツの製品の山だった。

ロシア語も仕方なしに覚えざるを得ない。作業はモートル巻線からやらされたが、一日のノルマは五百個、どう考えてもやれるものではなかった。

次の作業は鉄板切り、厚さ二ミリくらいの鉄板を一日五十枚がノルマ。黒パン三百五十グラム、スープ飯盒半分ではとてもやれるものではない。ソ連では比較的暖かいところだったが、作業はきつい。二年目になると、ほとんどの機械は日本人で動かすようになった。

ソ連人の技術をはるかに上回る抑留者の技術。食糧事情も好転してきた。ハラシヨールポータというわけである。収容所内にバザーを開き、必要な品物が配給されるようになり、ソ連人も顔を出しては物色するようになった。工場長はユダヤ人、我々には好意的だった。事務員

は白系ロシア人の娘、作業員にも三人の娘たちが働いていた。時折り挨拶をしてくるようになった。

半端ロシア語が災いして、一晩牢に入れられることもあったが、大した苦痛は感じなかった。三年目がやってきた。通訳が「ダモイだ」と言ってきたので、みんな抱きあって喜び、汽車に乗った。またまた二十五日の長旅の末、着いたところはナホトカの港が見える収容所。ところがである。ナホトカには日本人が十万人も集まっているから「ダモイニエート」(帰らない)ということになり、喜びもつかの間、ダモイは翌年と言いつ渡されて、トラックに分乗させられて、奥地の山合い収容所へ連行された。

白樺、シナの木、クルミの木の暗いほどに生え繁る山林地帯。作業は伐採。一日七立米がノルマである。鋸の目立てができるということで、目立て専門の毎日が続いた。木の下敷きになって何人かの死亡者が日増しにその数をふやしていった。

一足飛びにやってくるシベリアの冬も間近であるのに、履く靴がない。仕方がないので作業の合間をみつ

けて、縄切れ、服切れを集め、冬わらぐつをつくっては、みんなに分けたら、市庁が「ハラショーパチンキ」と褒めたので、二十人くらいでわらぐつづくりをやることになって、死亡者も出なくなった。

収容所の近くには抑留死亡者の墓地があった。墓標のつもりか、白樺の木切れがあったので、その数を数えたら百八本だった。酷寒と飢餓に耐えられず、無念のうちに死んだであろう仲間の墓標に合掌しながらの伐採作業で、自らの運のよさに感謝するのだった。野牛や狼が墓を掘り起こすのか、遠吠えが夜半の寒気を通して伝わってくることもたびたびだった。

四年目の夏近くになって「タモイ」といわれても、船で舞鶴の緑が見えるまでは不安な気持ちが続いてくるのだった。だまされて連れ返されはしないかの不安感だった。

ノルマに耐えて

新潟県 湯田 太郎

はじめに

私のシベリア抑留中の苦労を綴るに当たり、まずもってお許しいただきたいことは、小学生当時より綴り方（作文）は太の苦手でした。今でも変わりはないのですが、私としてはご協力できるのはこれくらいのことしかありません。

戦後四十年余を経て、戦後生まれが過半数を占める時代となった今日、悲惨な戦争の体験を語り継ぎ、二度と戦争のない世界にしたいという平和運動も起きておりますが、あたら青春時代を、国のため、天皇陛下のために命を捨てるのが、日本の繁栄につながることであるから、誇りと信念をもって戦ってこいと言われ、何も疑うこともなく、素直な気持ちで死生をとにした軍隊経験者。艱難辛苦を本当に理解してもらうことは、もはや困